

2004年NPAFC調査計画調整会議

うらわ しげひこ
浦和 茂彦 (調査研究課遺伝資源研究室長)

北太平洋溯河性魚類委員会(NPAFC)は、さけ・ます類の調査船調査やシンポジウムなど科学活動に関する協力を検討するため、毎年春季に調査計画調整会議(RPCM)を開催している。本年は5月12-13日にロシアのカムチャツカ半島東岸にある州都ペテロパブロスク・カムチャツキーにおいて本会議が開催され、また翌14日には「ベーリング海・アリューシャンさけ・ます国際共同調査(BASIS)」に関する検討会が開かれた。日本からの4名に加え、米国8名、韓国3名、カナダ1名、ロシア13名(他にオブザーバー多数)の研究者が出席し、米国のLoh-Lee Low氏が議長を務めた。

調査船計画

条約区域(北太平洋の公海)で実施するさけ・ます類の漁獲を伴う調査に関しては、母川国であるすべての加盟国に調査計画を事前に通知し承認を得ることがNPAFC条約第7条で定められている。日本は調査船6隻(おしよる丸、若竹丸、開洋丸、俊洋丸、開運丸、北光丸)を用いて本年度実施する沖合調査計画を提出し、各国の協力と理解を求めた。このうち新造の北光丸を用いて行う予定だったオホーツク海の秋期幼魚調査は、残念ながらロシア政府の入域許可が得られず日本200海里内の調査に限定される見込みである。ロシアはオホーツク海、ベーリング海と西部北太平洋でのさけ・ます類の資源量とプランクトンのモニタリングを中心とした調査計画を提出した。米国は主に幼魚をターゲットとし、アラスカ湾沿岸とベーリング海東部でトローリング調査を実施する。カナダもアラスカ湾大陸棚海域における幼魚の分布と生態、海洋環境、動物プランクトン量に関する調査を予定している。各国の調査船に乗船する研究員についても調整を行い、ベーリング海で共同調査を行う開洋丸には日本の乗船者に加え、韓国、ロシアと米国の研究者も乗船することになった。

生物標本、データや研究者の交換

主に系群識別のための基準群を充実させるため、各国とも遺伝標本や鱗標本の要求を行った。日本は米国に対してmtDNA分析用のサケ標本を要求し、後日その一部の提供を受けた。米国とカナダからはマイクロサテライトあるいはSNP(1塩基変異多型)分析用に日本産サケ標本の提供依頼があった。韓国は、耳石標識の研究者養成のため本年11月に日本の研究所に1名派遣したいこと、ふ化放流と資源評価の日本人エキスパートを1名

ずつ韓国に招待したいとの希望を表明した。

札幌で開催される第12回年次会議

本年秋に札幌コンベンションセンターで開催されるNPAFC年次会議および付随した行事の予定は次の通りである。

10月23日 NPAFC公開市民講座
10月24-29日 年次会議
10月30-31日 BASISワークショップ
11月1日 エクスカーション

NPAFC公開市民講座

NPAFCの役割やさけ・ます資源の現状などについて一般の方や漁業者のみなさまに知っていただくため、公開市民講座が10月23日に札幌コンベンションセンターで開催される。詳細については別記の通りである。



図1. 朝のペテロパブロスク・カムチャツキー市内とアバチャ湾を望む。



図2. NPAFC調査計画調整会議の行われた市立図書館。

BASIS ワークショップ

本年 10 月 30-31 日に札幌コンベンションセンターで BASIS-2004: Salmon and Marine Ecosystems in the Bering Sea and Adjacent Waters (ベーリング海と周辺海域におけるさけ・ます類と海洋生態系) が開催される。プログラムや参加申し込み方法などについては別記の通りである。

NPAFC-PICES 共同シンポジウム

2005 年秋に韓国ソウルで開かれる予定の第 13

回 NPAFC 年次会議に併せて、NPAFC と PICES による共同シンポジウムを開催することで検討を開始した。シンポジウムのタイトルは「太平洋サケの現状と北太平洋生態系における役割(the status of Pacific salmon and their role in North Pacific ecosystems)」で、1) 太平洋サケの資源量と生物学的特徴、2) 北太平洋生態系機構における太平洋サケの役割、3) 北太平洋生態系の指標としての太平洋サケをトピックスとして扱う。

NPAFC 国際ワークショップのご案内

BASIS-2004: ベーリング海と周辺海域におけるさけ・ます類と海洋生態系 (Salmon and Marine Ecosystems in the Bering Sea and Adjacent Waters)

日時：2004 年 10 月 30-31 日

会場：札幌コンベンションセンター（小ホール）

背景と目的

過去 10 年間にアジアや北米系さけ・ます類の多くの個体群において海洋成長や生残の大きな変動がみられ、これらはベーリング海や周辺海域の生態系変動と関連していると考えられています。しかし、ベーリング海におけるさけ・ます類や環境に関する科学的モニタリングシステムが不足していたため、どのような環境変動が起き、その変動がさけ・ます類資源にどのような影響を与えているのかについては不明でした。2002 年に北太平洋湖河性魚類委員会(NPAFC)のコーディネートによる「ベーリング海・アリューシャンさけ・ます国際共同調査(BASIS)」が開始されました。この共同調査は、気候変動によりもたらされる海洋環境に対するさけ・ます類の生物学的応答機構を明らかにすることを目的としており、1) さけ・ます類の季節的移動とベーリング海生態系との関係、2) ベーリング海における生物生産とさけ・ます類の成長に及ぼす要因、3) ベーリング海を主な生息場とするさけ・ます個体群間の資源変動の類似性と生残傾向に関連した共通要因、4) さけ・ます類を生産するベーリング海的环境収容力、に関する調査が含まれています。今回のワークショップは、BASIS や他の調査により得られた情報と新たな問題点を論議し、将来の研究計画に反映させるために開催されます。



図1. 水産庁調査船「開洋丸」によるベーリング海さけ・ますトロール調査(2002年9月)。



図2. 開洋丸のトロール網で採集されたベーリング海に生息するさけ・ます類やキタノホッケ。